

2017

矢切通信

第九話



←矢切畑のあちこちでホトケノザが咲き始めた。イヌフグリやノボロギクも咲いてきた。

→江戸川の川面も春らしく穏やか。舟はすべるように行く。

ずいぶん暖かくなった。二三日おきに吹いていた強風もおさまって、いかにも春らしさがましてきた。

そんな穏やかな日曜日、大きなアルミの箱を提げた女性がやって来た。舟に乗りに来たにしては乗り場のほうに行かないで、我々が舟頭さんと話している近くにやって来てアルミのケースを置いた。

「むかし、よく乗ってたの。三十年近くたつわ」

たずねもしないのにその女性は語りはじめた。

「わたし、向こう岸の葛飾に住んでるの。小学生のころ、あちら側から乗って、帰るときもまた乗ってたの」

それがどうしたの？ といいたいいところをがまんして聞いていると、やおらアルミケースを開けて、

「これね、ドローンなの」

ケースの中には四枚のプロペラが四隅についた白いカメラつきドロンをとり出して見せた。

「これでね、撮影するの。これが操縦器、そしてこれがモニター」

今週のクマ

→クマは土手の草むらにはいってウンチをする。けして人が通る道などではしない。



→矢切の渡しに通じる道の両側に植えられているヒカンザクラ系の桜の花が咲き始めた。やっぱり春だなあ～！



「どこかの取材なの」

舟頭さんがたずねた。

「そうじゃないけど……。まだ川の上を飛ばすのは怖いわ。川に落としたりしたら拾いに行けないし……」

そういう彼女に私は、

「それだったらここじゃなく、ほら、あそこの堤防の上に戻って飛ばしたら？」

そういうと彼女は未練っぽく、アルミのケースにふたをして、戻って行った。

「ときどき、いるんだよね、わけのわからない人が……」

舟頭さんが説明するところによると、これまでもドラクエが流行ったころ、矢切の渡しにもスマートフォンを手にした若者が何人もやって来ていた。

「あんなのが多くなったら困るね」
ヤツさんがいった。

「そうだね。そのうちにドローンの衝突事故が起こったりして……」

私はそのことが心配になった。

いまのところドローンを飛ばすには免許はいらない。買ったその日から誰でも飛ばすことができる。値段もピンからキリまでで、カメラつきで一万円前後からある。大変な世の中になったものだ。